

No.

文士らに  
に感心す

オオニタニ

堀木克三

11/13

ヤオニタニ、かりあふ題の下に、私は私の  
目に映じた文士といふものを書いた見やうと  
果す。

地方の文学青年の人々が遙かに東京の文壇  
といふものを想ひ浮べる時に、必ずや、東京  
の文士諸先子は、華やかにクツフエにでも集  
つて暮らしてゐるものに違ひないと思ふ。而し  
に實はこの想像は獨り地方の好文学の青<sup>年</sup>諸子  
に限らない。私の如きも實は東京に居て、文  
壇諸先子といふやうなものを考へるときにか  
ういふ光景が浮ぶのである。私の目にも實は

文壇といふものがえう云ふものに映じてゐる。  
私は時々私の好みから文学評論みたいなも  
のをものする。それで時々月評家とか(輕蔑  
の意味も勿論含む)批評家とかいふやうな  
ことを云はれる。勿論私自身としても、文